
2 魔に魅入られし闇の姫

明星 幽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2 魔に魅入られし闇の姫

【Nコード】

N5606V

【作者名】

明星 幽

【あらすじ】

嫌な予感に導かれてやって来たのは剣と魔法のRPG風異世界！しかも、目覚めた場所は絢爛豪華な王宮・・・では無く、魔物が集う漆黒の魔城！？ ありきたりだけど何処までも裏道を通って行ってみたいと想っている新物語、『闇の姫シリーズ』第二弾、開幕！

第一話 異世界へ召喚！？（前書き）

『闇の姫シリーズ』第二弾！

お楽しみください^^

第一話 異世界へ召喚！？

「いった！？」

浮遊感を伴った無防備な身体のまま意識を飛ばしていたあたしは、イキナリ硬い地面に全身を強打して思わず声を上げた。

「~~~~~！」

意識が無かった為に受け身を取れなかった身体がズキズキと容赦なく痛み、お陰で意識を取り戻したものの、暫く悶絶する破目になった。

おのれ・・・一体誰だ、こんなムダに硬い地面に落とした奴は。

胸中で恨み言を言いながらも、何とか身体を起こす。
起こして、気付いた。

あたしは確かトラックにはねられた筈だ、と。

当然身体が痛いのは理解できるが、かなりのスピード且つクリティカルヒット並みに綺麗に衝突した為に宙へと投げ飛ばされたのだ。

・・・痛い、で終わっていいの？

一瞬停止しかける思考を無理やり起動させて再度検証。

あたしは大型トラックに見事に激突された。まあ、これはオーケーでしょう。

問題はそうなった原因。足が自分の意思とは関係なく動いたあの怪現象。

いったいあれは何だったのだろうか？

16年間と言つ月日の中でも、あんな事一度も無かった。

いや、あつても困るんだけどさ。

それに・・・

「ここ、何所よ・・・。」

これは何気に真剣な疑問だった。

道の真ん中でトラックにはねられてそのまま落ちたのだ。

普通ならどう考えても同じ道路に落ちるのが常識だろう。

そりゃあ少しばかり飛び過ぎであの道のすぐ傍にあった公園の中にダイブ、何て事もあるかもしれないんだけどさ・・・。

でも、ここは公園の中でもなければ、あの道路でも無かった。

ハッキリ言えば、全く見た事も無い場所。 空間・・・否、

部屋、だ。

黒一色の壁に、同じく黒い天井と地面に綺麗な星・・・いわゆる《魔法陣》と言つやつが描かれていて、僅かに白く光っていた。

窓も無ければ扉も無い、まるでくり抜かれて隔離された様な不思議な空間。

そして、先程から感じていたこの場を占める空気とは別の、おそらく魔法陣から放たれているのであるう見えない煙の様な、はたまた普通の空気とは違う空気の様な説明出来ない不思議なもの。

・・・こーゆうのを「魔力」って言うんだろっか・・・？

と、考えてから慌てて踏み止まる。

いくらなんでもあり得ないでしょう。現代に魔法なんて存在してないよ。

ちよつぱり未来を予想したり、真実を言い当てたり出来る超人サ
ン達がいるだけで、そんなものは存在してないよ。

ここが、今までと同じ世界ならば、の話になるけど・・・。

「・・・」

いかん、自分で考えた事なのに思わず沈黙してしまった。

そんなまさか、ね。

あり得ないでしょう？

「異世界に召喚・・・？」

まさか、ねえ？

ふつーにあり得ないって。

そんな事。

考えるならもう少し現実味のある現状把握をしようよ、自分。

「ある訳、無いよね・・・？」

絞り出した声は僅かに震えていて・・・。

自分の意思の奥底で、「喜び」と言う感情が湧き上がってくるの
を必死で押さえて、あたしはもう一度言葉に出した。

「異世界召喚なんて、そんなアニメや小説みたいな事、あるわけ無いよね？」

考えの否定と期待との間で揺れる心を無理やり押し殺してわざと疑問形にして言葉を発する。

答えを知る事が怖くて・・・どうしようもなく恐くて、それでも答えてくれる事を望んでいたから。

必死になって押し殺しても、奥底にあったはずの感情がいつの間にか上へと出てきて、支配しようとしていたから。

異世界にこれたかもしれない喜びに、不安が混じって身体が震えてしまつて。

それを何とか押し殺して感情を整理しようと、じっと綺麗な星が描かれた黒い地面を見つめた。

だから、気付かなかった。

否、最初は、気付けなかった。

“自分は異世界に来たのではないか”

そんな事と、その考えが呼んだ恐怖と喜悦についての云々を割と必死で考えていたあたしは気付けなかったのだ。

音も無く背後から迫っていた黒い気配に。

第二話 とりあえず言つ通りに

気配が僅かな光源から生まれた影をあたしの背中に落とす直前。

「！」

反射的に息を止めて気配の主に向き合う形で立ち上がり、その勢いを使って数歩後ろへ飛びずさる。

飛びずさってから、きちんとお母さんの特訓をマスターしといて良かったなーと、他人事のように思った。

・・・自慢ではないけど、あたしは割と見た目が美人な方である。顔は普通にかわいいと思ってるし、身体も割と細く、ヒキコモリなので色も白い。ちょっと小さいけど出る所は出てるし、引つ込む所は、きちんと引つ込んでいる。

簡単に結論を出すと、まあまあ可愛らしい方である。

一応、告白された事とかも数回程度ならあった。それ以上の進展はお断りしたけど。

さて、要するに何が言いたいのかというと、あれだよあれ。

その・・・、意外と危険な事もあったのですよ、ハイ。

それこそこのアニメだっ！ って思わず突っ込みを入れそうな事とかも。

で、小さい頃にも何度か知らないおじさんやらお兄さんやらに連れて行かれそうになった時がありました。

そのせいか・・・と言つかほとんどそう言った事があった為に、幼い頃からそういう場合の対処法云々をお母さんに教えて貰ってたり

して。

連れ込まれたら鳩尾殴って逃げるとか、それがダメならちよつと危険な所を蹴っちゃえ、とか。

普段は優しいお母さんがあまりにも真剣かつもの凄い笑顔で教えて下さるもんだから、ついついマスターしちゃって。

しかし、まさにその特訓のお陰であたしは黒い不審者・・・当然勝手に決め付けたけど・・・から距離を取れたのだから、決して無駄ではなかったという事で。

お母さんありがとう。

なんて胸中で言ってから、改めて前に居る何か黒い空気を纏っている人物に向き直る。

そして、あまり相手を刺激しない様にザッと相手の特徴を読み取る。

読み取った後で、半分くらい後悔した。

だって、あり得ないでしょ。

紅い目、なんて。

カラコンでも無理な程綺麗に紅いんだよ、目が。

「なんてファンタジー・・・」

思わず半眼になって呟いた言葉に、背の高い痩身の男の人は僅かに紅い瞳を細めた。

あのね、お兄さん・・・それ何気にコワイんですけど・・・？

とりあえず今は現状を何も理解できていない無知な子供、と言う事にしておいた方が便利そうだし、ね。

などと口には出さずに色々と思いを巡らしていたら、暫く沈黙していたお兄さんが、

「とりあえずこちらへ・・・」

といつの間にかお兄さん自身の後ろにあった扉へと向かって歩き始めたので、地面に落としたままだった通学用の鞆を持ち、一応付いて行く。

反抗してもただの一般人の、しかもふつーの女子高生には到底理解不能な現状では何かをする事も出来ないし、例え知りたい事を色々と理解出来た所でそもそも何が出来るのだろうか？

突破不可能なこの難解状態では何をしても上手くいかない、世の中決まっているのだ。

無言のまま前を歩くお兄さんに付いて、同じく無言のままあたしは真っ黒な長い通路を歩いて行く。

どうやら黒い地面は石で作られている様で、通学用の革靴でも歩く度にカツカツと音が鳴っている。

わりと好みの音だなあ。　どーしたらこんなに綺麗な音がでるんだろう？

などと全く意味の無い事を考えながら暫く右や左に曲がって歩いた後、繊細な銀の模様が描かれた扉の前へと出る。

お兄さんがと止まったのにつられてあたしも止まると、不意にお兄さんが口を開いた。

「今日はここでお休みを。」

そう銀の扉を一瞥しながら言った後、お兄さんはあたしに向き直り、簡潔に言葉を紡いで行く。

「今日はまだ会う事は出来ませんが、明日からは専属のメイドが貴方の世話をします。解らない事があればその者に聞くと良いでしょう。大体の事なら教えられると思います。」

食事は人間の食べている物を持ってこさせます。基本的に睡眠と食事はこの部屋で行ってもらいますので、不用意に他の部屋へ入ったりはしない様に。覚えていて下さいね。」

とりあえず明日1日は貴方が知らなければならぬ事を知る自由な時間に使って良いので、どうぞ今の内にこの世界の常識を知っておいて下さい。」

・・・いやー、あのですねえ。

なんだが色々意味を聞きなくなる様な言葉をふんだんに使って一気にまくし立てて下さった後、きれーなお兄さんは改まってこう言うてきた。

「私の名はブラッド。明後日からは長いお付き合いになると思っているので詳しい自己紹介は後ほど。」

とりあえず、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「・・・名前、」

条件反射の如く言葉が詰まる。

知らない人に名前を教えちゃいけません！と言っていたお母さんの言葉を思い出したのだ。

が、それは長くは続かず、あたしは警戒しながらも素直に名前を言う。

「神月、^{みつぎ}です。」

「ミツキ、さん・・・解りました。では、また後日、お会いしましょう。」

「え、あ・・・」

名前を聞かれて緊張していたあたしとは正反対に、お兄さん・・・改めブラッドさんは黒髪とマントを揺らしながら颯爽と立ち去ってゆく。

うゝむ・・・何だが色々無駄な心配事が多い気がする。
人が不安がつてるのにもろスルーだもんなあ・・・。

少しばかり虚しくなっただけ溜息を付しながらも、とりあえずは、と指定された銀の扉の部屋へと入る事にした。

第二話 とりあえず言つ通りに（後書き）

これからはこのペースで進む事になるかと。

第三話 初めての私室と状況整理（前書き）

遅れて申し訳ない！

第三話 初めての私室と状況整理

得体の知れない意味不明な状況下に立たされてから今まで。

それ程長くは無かったのだろうけども緊張と理解不能の連続だった為にマヒしていた感覚がようやく戻って来た。

理由は至って簡単。

「し・・・私室だあ！」

そう、あたし柏木^{かしわぎ} 神月^{みつき}は、生まれてこのかた16年。一度も自分だけの私室と言うモノを持った事が無かったのだっ！

「すっ、すごおい！ 机もイスもソファーもある！ ベット・・・で、これってもしかして〃天涯付き〃ってやつ！？ わああ、どうしよう本当に嬉しいっ！！」

・・・こほん。

いやあ、我ながらちよつとはしゃぎ過ぎた。恥ずかしい・・・。

でも、正直これは本当に嬉しい。

真面目に意味不明な事になっちゃってるけど、こればかりは現状に感謝しないとね。

「ああ・・・ベットふかふか・・・」

思わず天涯付きベットにダイブして枕を抱えて丸くなりかけて、はたと思い留まる。

「寝る前に状況を整理しとかないと・・・」

明日はメイドさんが来るらしいから、ゆっくり整理出来るかどうか解らないからね。

と言うか、明日は明日で色々頭を使わないといけないだろうから、今日はその為の備えでもしておきましょうかね。

「よし！」

とりあえず気合いを入れて、状況整理スタート。

鞆の中に入っていたルーズリーフとシャープンを机の上に置いて、椅子に腰かける。

そのままなるべく頭に残る様に意識して声に出しながらまずは現状の確認。

「まず、夢落ちで無いのならば、おそらくここは異世界、っと。」

シャープンでその一文を書きながら、次の確認。

「あたしはおそらく召喚されてここに来た、っと。」

トラックに撥ねられて宙に舞って、落ちたのが魔法陣が書かれていた床なのだから、これは多分間違い無いと、思う。

・・・おそらくとか多分とか思うとか、やっぱりあやふやな表現しか出来ないのは、やはりまだ現実味が無いからなのだろう。

一瞬だけ僅かに顔を歪めた後、再びシャープンを滑らせながら次の確認。

「現地人第一号は、黒髪に紅い目のおそらく人外、ブラッドさん、っと。」

・・・うん。言い分が酷いって事位自覚してるよ。

あえて本心を言うならわざとだし。

文を書き終えたシャーペンを指でくるくる回しながら、今度は努めて声に出さずにブラッドさんの行動と言動を思い返してみる。

丁寧な口調。それに合わないどこか上から目線な雰囲気。簡潔だけど、結論は変わらない。

「あたしがあんまり好きになれないタイプの人だなー。」

思った途端に言葉にしてた。

いかんいかん。気を付けないと。

現状で不快感を与えたら何されるか解らないものね。

じゃ、無くて。

整理よ整理。危うく別の場所へ思考を飛ばす所だった。

今はきれーなお兄さんの事はどうでもいいのよ。

「えーと、明日いっばいは状況確認ができる、アンド、メイドさんがやってくる、っと。」

再びシャーペンを持ち直して書きながら、なんだか複雑な気分になつて来る。

現状の確認が出来るのは良いんだけども・・・。

メイドさんって何よ。意味分からんから。

「はー、大丈夫じゃない、問題だー！」

一部では有名な台詞を叫んだ後、一通りの整理をさほど時間が掛

からず終えたので、早急に寝る事にして、天井にある不思議な形の電球を消そうとスイッチを探してみると・・・。

「・・・無いじゃん。」

暫く探し回ったけど、全くそれらしきものは見つからない。

仕方なくそのままベットに潜り込むと、数秒経った後、静かに光が弱くなり、部屋は窓から差し込む「銀」の月の光でしか照らされていない状態になった。

一体どうなってるの・・・。

やっぱり理解が出来ない。

と言うか、ここに来てからは本当に理解が出来ない事ばかりだ。

「・・・ほんとに訳が解らない。」

こうなったら明日メイドさんから根ほり葉ほり情報を聞き出してやる。

何て思いながら、着替えるものが無かったから制服のまま布団を被り、夜の静寂に身を任せてあたしはゆっくりと、おそらく今日一番の安心感と共に眠りに就いた。

結論：天涯付きふかふかベットは最強でした。

第四話 はじめてのメイドさん（前書き）

ま、また一日遅れてしまったっ！！

すみませんー><;

第四話 はじめましてのメイドさん

異世界2日目の朝。

窓から差し込んでくる陽光の眩しさに、目が覚めた。

お日様の光で目が覚めるなんてはじめてだー。

とか何とかのんきに思いつつも、ふかふかベッドから起き上がり伸びをする。

少しの間だけベッドの上でばーとした後、するりとベッドから降りて机へ向かい、昨日書きとめたメモを見つつ今日の予定を考える。

とりあえずはメイドさんが信用するのに足りる人なのかを検討しないかね。

普段はそんな事しないけど、なにせ今は状況が「普通」じゃないからなあ。

少しの油断が命取り、何て事もさらにありそうだし、ねえ？

まあ、兎にも角にも朝起きて理解した事。

「夢落ちじゃ無い、っと。」

ちよっと複雑な心境で、昨日のメモに付け足す。

今の所は用心して、あたしの常識が通用しない「異世界」だって考えていた方がいいみたい。

・・・あゝ、ちよっと嬉しい。

なんて思ってみてから、苦笑する。

やっぱりね、あたしも懂れてたのよね・・・。

「異世界トリップ」

ってやつにさ。

勇者にも、お姫様にもなりたい訳じゃないけど、あの世界とは違う世界を旅してみたいって思う願望はあったんだ。

本心を言ってしまうえば、あたしはもうあの世界での楽しみはほとんど見つけられないでいたからね。

だから ここに來れたのは、実は嬉しかったりもする。

それこそ、召喚されたあの瞬間に思った通りに。

「・・・つまらない世界より刺激的な世界の方が好きかも・・・？」

呟いてから現状を思い出して訂正。

・・・刺激が多すぎるのは困るのですよ。

冷静さと言うモノはどんな時でも持っているべきだと改めて意識を研ぎ澄ました・・・

丁度その時だった。

コンコン、と扉を叩く音に続いて、

「失礼します。」

と言う澄んだ女の人の声が響いた。

「あ、どうぞ」

反射的に返事をした後、慌てて出しっぱなしにしていたルーズリーフとシャーペンを鞆の中に入れる。

何があるか解ったもんじゃないからね。
用心はしないよりした方が良いし。

あたしの慌ただしさが扉の外にも伝わったのか、はたまた全て解っているのか、少しの間をおいた後に、扉が開かれた。

そして、開かれた扉から優雅に部屋の中へと入って来た女の人に、あたしは思った。

美人がメイド服を着るものではない。
と。

わりと本気で思いました。 ハイ、マジで。

だって、ほんとに様になってるんだもんっ！
男殺しとはこのことに違いない！！

などと、心の中では叫び、表では無言のあたしに対し、限りなく黒に近い青の髪を上の方でお団子にして纏め、紫紺の双眸をひたとあたしに添えたメイドさんはこれまた優雅な仕草で一礼をした後、澄んだ声で言葉を発した。

「ブラッド様からお伺いしているとは思いますが、改めて。
私はこれよりミツキ様の身のお世話をさせていただきます事になりました、アメジストと申します。 以後、お見知りおきを。」

言葉を紡ぎ終わった後にまた視線を合わせた紫紺の瞳に、メイド

さん、改めアメジストさんの名前と同じ宝玉を思い浮かべる。

あの宝玉は嫌いじゃないなー、と関係無い事を考えつつも、とりあえず第一印象はそれほど悪い人じゃ無い、と言う結論に至る。

あたしは人を見る目は結構あると自負している。

因みにブラッドさんは、とてつもなく悪いとは思わなかったけど、何となく嫌な感じがした。

その事に関して、このアメジストさんは、全く不安じゃない訳ではないものの、決して嫌な感じはしないのだ。

とりあえず微笑みを浮かべて、

「こちらこそ、よろしくお願いしますね、アメジストさん。」
と返してみる。

すると、アメジストさんは一瞬瞠目した後、すっと瞳を伏せ、そしてふわりと笑って、

「アメジスト、と及び下さいミツキ様。敬語も必要ありません。慣れない世界でさぞ心細いでしょう。私でよければ何時何時でもお傍に控え、話し相手となりましょう。どうか気軽になさってください。」

と、柔らかな声で言ってくれた。

なんかお母さんに似てるな……。

ふとそんな風に思い、ちよつとだけ寂しくなった。

でも、その代わりに彼女が居てくれると言っているのだ。

うん、合格。彼女、アメジストの事は現状では信じて大丈夫

な人、と訂正。

そして、それを伝える意味でも、彼女の言葉に答える意味でも、あたしは「本当」の笑顔をつかべて答えた。

「うん！ これからよろしくね、アメジスト！」

後から気付いたけど、それはあたしがこの世界ではじめて浮かべた心からの笑顔だった。

第五話 知るべき事が多すぎるっ！

軽い自己紹介が終わった後、アメジストはあたしにイスに座る様に促してきた。

なにするんだろお？

なんて胸中では気の抜けた言葉を浮かべつつ、彼女の動きに注目する。

流石にいきなり後ろからバツサリ、何て事は無いだろうし、一応信用はしてるんだけどね。

用心は必要だと思うのですよ。

そうして彼女の動きを目で追って、物の数秒もしない内に瞠目する事になった。

「昨日は何も食べていないとお聞きしました。どうぞぐゅっくり満足するまで食べて下さいね。」

そう言ったアメジストは、何も無い横の空間から大量の料理・・・全て西洋風・・・を取り出したのだ。

・・・ちよっと、待て。

「どっから出てきたの!？」

思わずイスから立ち上がって身を乗り出して尋ねるあたしに、アメジストは若干後ろに下がって「えっ？」と素っ頓狂な声を上げた。

うん。ごめんねアメジスト・・・。

でも貴方たちの常識はあたしの頭の中の辞書には載って無いんだ

よー！

そう思いながらも目は彼女の周りをきよろきよろ見回す。

当然カートとかも無いし、そもそもアメジストが入って来た時は間違い無く手ぶらだった。

・・・本当にどうなんてるんでしょ。

いよいよ理解不能で頭をひねりだしたあたしに、アメジストはやつと状況を把握したよう。

「そういえば・・・ミツキ様はまだこの世界について殆どご理解出来ていないのでしたね。失礼しました。」

そういつて一度丁寧にぺこりと頭を下げってくれる。

いやあ、謝る程のことじゃ無い気もするけど。とりあえずありがとう。

感謝の意味を込めてっ少しだけ微笑んでみせると、アメジストはほつとしたように同じく微笑みを浮かべて料理を机の上に置く。

さて、それで？

「この料理はどこから出してきたの？」

あたしの再度の質問に、アメジストは「どうぞ気楽に食べながらお聞きください。」と言って料理を差し出す。

うーむ。まあ、腹が減っては戦は出来ぬ、って言うしね。

いただきながら聞きましょう。

あたしは素直に料理を口に運びつつ・・・何気にめちやくちや美味しかった・・・アメジストの説明を聞く。

「これらは全て、〃スペースケース〃と呼ばれる、この世界にいる者なら誰でも持っている物を無限に収納できる空間の箱より出してきたのです。」

「空間の箱、かぁ……。ねね、それってあたしにもあるの？」
素朴な疑問に「勿論です。」と笑って返してくれる。

へえ。あるんだ？

でもどこに？ どの様に？

あたしの、瞳に浮かんだ疑問に気付いたのだらう、アメジストは再び微笑みを浮かべながら、

「いずれお判りになると思います。早ければ明日にでも。」
「明日？」

オウム返しに聞いてから、ブラッドさんの言葉を思い出す。

「えーと、〃明後日からは長いお付き合いになると思うので〃とか言ってたっけ？ ブラッドさんが何かあたしにしてくれるの？」

うる覚えの記憶を何とか繋げて問うあたしにアメジストは頷いた後、

「おそらく、あるお方と会わせる筈です。」
と、やけに真剣に言葉を紡ぐ。

〃あるお方〃ねー。

「なんか偉い人なの？ そのあるお方って人は。」

「ええ。人、ではありませんけれど、私達にとっては偉大な存在である事には変わりありません。」

あたしの言葉を訂正しつつも答えるアメジストの綺麗な紫紺の瞳

は、何処か遠くを映していた。

「ふうん？」

あたしは気の無い返事をして食事の最後の一口を食べ終え、ごちそうさま、と手を合わせる。

すると・・・

「あの・・・何ですか？ その、ゴチソウサマ、と言うのは」

少々あやふやな発音で小首を傾げて訪ねてくるアメジストの瞳に純粹な好奇心が現れる。

・・・日本語をうまく話せない外国人ってこんな感じなんだろうか？

と全く関係の無い事を考えつつも、簡単に説明してみる。

「これはあたしの国の文化の一つ。 食事を食べ終えた後に、改めて作ってくれた人とか食材とかに感謝の意を表すものだよ。 ちなみにさっきは言わなかったけど食事を始める時は「いただきます」って言うの。」

「そ、そんな文化があるんですね！」

おお、美人さんの喜ぶ姿ってかわいいーのね！！

・・・こほん。

気を改めて、

「そんなにこっちの文化は珍しいの？」

と聞いてみると・・・

「はい！ こちらにはその様な文化は存在していませんから。 と

ても興味深いと思います。」

見事な笑顔で返されちゃったよ。

本当に可愛いね、アメジスト。

いや、見た目どう見てもあたしより年上のおねえさんなんだけどね！。

そんな事を思いながらも、とりあえずはしゃぐアメジストを落ちつける為に、それから暫く四苦八苦する事になったのだった……。

第五話 知るべき事が多すぎるっ！（後書き）

後一話で完結します^^

第六話 情報収集は大切だと思う

「すみません、色々取り乱してしまいました。」

暫く奮闘した後、ようやく冷静になって、素直に謝ってくれる彼女に「別にいいよー。あたしだってこの部屋に初めて入った昨日ははしゃいでたしね。」と言って頭を上げさせた後、早速情報収集に取り掛かった。

で、昼食と晩食の時だけに話を中断して、それ以外全て情報収集につぎ込んだ結果。

解ったのは以下の事。

一つ目は、この世界の大陸や国について。

アメジスト曰く、

「この世界は、一つの巨大な大陸と、その周りに海を隔てて存在する大小様々な島国からできています。」

大陸と島々には、世界最大にして世界で初めて作られた最も古い歴史を持つ唯一の皇国『エンパイア帝国』を一番大きな規模の大国として、そこから三大王国『麗しの豊地』『ルーシッド』『黒の軍場』『ヴァンクウイシュ』『海上の宝石』『サファイア』、最も神聖な国である『神教の聖国』『サンクチュアリ』、妖精族の故郷である『文芸の賢国』『ペネトレイト』等を含めた大小様々な国と辺境に広がる村が存在します。

なお、六大国の他に、地方の魔王や魔族が収める魔の国や、エンパイア帝国のすぐ近くに存在する我らが『大魔王』が納める『魔大国』等が存在しています。」

だ、そう。

念のために、この場所について聞くと、ここは「黒の魔城」と呼ばれる魔族が住まう城で、どうやら荒廃した村々が周りにあるだけの荒れた場所だと言う事が判明。

一番近くても山を二つほど超えた先にある『ヴァンクウイシュ王国』しか大きな国は無いらしく、それ以外は小さな村や町がある程度。

でも、本音を言えばそんなことはどーでも良かった。

そんなことより、もっと衝撃的な事があったから。

つまりは・・・

「・・・・ここって、魔族・・・もとい人間の敵が住む城なんだ！」

「

ついつい言葉に出して言ったあたしに、アメジストは小首を傾げてこう言った。

「ええ。『魔の姫』が降臨する所なのですから、当然、魔族の城ですが・・・・？」

心底不思議そうな瞳で言わないで下さいおねえさん・・・。

ああ、そうか、そうなのね。

あたしって既に人類の敵なの・・・。

半笑いを浮かべつつ窓に視線を映して黄昏てるあたしを心配しつつも、アメジストは、

「明日になればミツキ様がどんな存在なのか、ブラッド様が教えて下さいます。」

と、丁寧付け足しをしてくれた。
それにありがとーとお礼を言つて次の情報を問つた。

二つ目は、種族について。

これは、一つ目の情報の時にも引つかかっていた事もあつて、アメジストも丁寧に教えてくれた。

曰く、

「この世界には、人間・妖精・獣人・魔族の四つの種類が存在しています。

それぞれの種族には何らかの特徴があり、例えば人間は応用が利き、妖精は魔法を操る術に長けています。獣人は身体能力がとて高く、私達魔族は闇の力を駆使するのに長けています。

また、魔族とは私達の様に「人型」をした者から、異形の形をとる魔物や魔獣まで幅広いのですが、基本人間だけではなく妖精族や獣人族も含めた各種族共通の敵だと言えるでしょうね。」

「共通の敵」とか、アメジストは簡単に言ってくれたけど、その瞳は何処か悲しげだった。

だからあえてあたしはそちらには突っ込まず、別の気になった事を問つた。

「闇の力、つて何？」

正直、この世界に「魔法」なるものがある事は薄々気づいていたけれど、わざわざ区別までするのだ。

「闇の力」と言うモノは、おそらく魔法とは別のモノなのだろう、と考えた。

「闇の力とは、私達魔族と神のみが使う事の出来る魔法とは異なる

力で、一種の意思の具現化した姿のものを言います。」

意思の具現化した姿、ね。

「基本は黒い影や煙の様な姿をしていて、手足の様に扱う事が出来ます。」

ほうほう。それは便利。

頷くあたしに、アメジストは「ミツキ様もすぐに使えるようになりますよ。」と微笑んでくれる。

うゝむ、使えて損はしなさそうだけど・・・

それって確実に「魔族」認定される決定的な要素な訳でしょ？
使えるようになって、あんまり使いたくないね！。

一応まだ全種族的に回るつもりはないからさ。

等を務めて胸中だけで考えつつ、アメジストの声に耳を傾ける。

「種族別の拠点では、ルーシッド王国は人間が、ペネトレイト賢国は妖精族が、サファイア王国は獣人族が多い事が特徴です。

魔族は基本どこにでもいると思っていれば問題ないでしょう。」

自由だねえ、魔族は。

「りょーかい。」

にこりと微笑みつつ次の問い。

三つ目は、とりあえず知っていたら便利そうな魔法について。

曰く、

「魔法には、全てで10の種類があります。」

「多いね……。」

と返しつつ、苦笑しながら教えてくれたアメジストの言葉をまとめるとこんな感じ。

破壊と闇を司る《闇の魔法》 再生と光を司る《光の魔法》

風を司る《《風の魔法》

水を司る《水の魔法》 炎を司る《火の魔法》 緑とティム

を司る《緑の魔法》

土を司る《土の魔法》 雷や電気を司る《雷の魔法》 毒と

呪を司る《毒の魔法》

魅力や色気を司る《魅力の魔法》

後は、これらの発展魔法があるらしい。

水の魔法なら氷、とかね。

それぞれの属性によって得手不得手が決まるらしいけど、真っ暗になってたしそろそろ明日に備えて眠らないといけないので、それは保留にする事にした。

最後に、「お風呂って無いの？」と聞いてみると……

「申し訳ございません……。この城にはその様な設備はありません。」

と頭を下げられた。

やっぱり不運なんです
ね、分かります。

第六話 情報収集は大切だと思う（後書き）

以上で『闇の姫シリーズ』第二弾は完結です^^

読んで下さってありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5606v/>

2 魔に魅入られし闇の姫

2011年8月24日19時14分発行